

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備事業

擬宝珠橋復元工事完成セレモニーの開催について

鳥取城跡は、昭和32年に史跡指定を受け、昭和34年より石垣などの保存修理事業を進めてきました。

平成17年度には「保存整備基本計画」を策定し、復元整備の第一段階として、平成30年度を目標に「大手登城路」の復元整備を行うこととし、計画的に事業を進めています。

発掘調査の成果の反映や学術成果を反映した設計を実施し、文化庁と正確な復元のための協議を続けてきた結果、「擬宝珠橋」については計画通り、平成30年度9月下旬に完成する予定となりました。

この復元が完成すれば、文化庁が認めた城郭の復元橋としては、国内最長の橋となります。

これに併せて、本市の中核市移行記念事業及び明治150年記念として、復元工事の完成した「擬宝珠橋」について、下記のとおり渡り初めを行います。

記

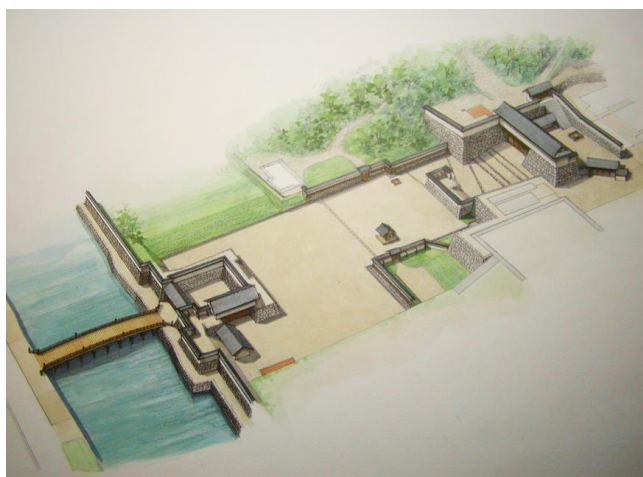
(1) 事業の概要

- (ア) 開催日時 平成30年9月30日(予定)
(イ) 会場 史跡鳥取城跡 擬宝珠橋(東町・久松公園内)
(ウ) 招待予定者 池田百合子氏(旧藩主池田家当主) 文化庁 他
(エ) 内容

市長をはじめとする事業関係者のほか、旧藩主池田家の現当主・池田百合子氏、歴史上鳥取城とゆかりの深い人々が橋を渡り、明治12年の二ノ丸・三階櫓取り壊し以来、最初の大型建造物の復元となった擬宝珠橋の復元を祝います。

(2) その他

その他の建物についても、やや工程は遅れているが、平成35年頃には順次完成できる見込みです。(今後の工程については30年度内に検討し、「保存整備基本計画」を一部改訂して対応する)



大手登城路復元イメージ図



擬宝珠橋・中ノ御門復元イメージ図

【参考】

(1) 史跡鳥取城跡 擬宝珠橋（復元）の概要

全長 約 36m 全幅 約 6m

材質 クリ・ヒノキ

特徴など 復元橋としては日本最長級の橋である。

水中に残る橋脚遺構を保存するため、コンクリート橋の杭・基礎を利用して水中にステンレス製の水中梁を設ける。

鳥取城の大手の橋として、参勤交代の玄関になっていたほか、藩領の測定の起点ともなっていた。

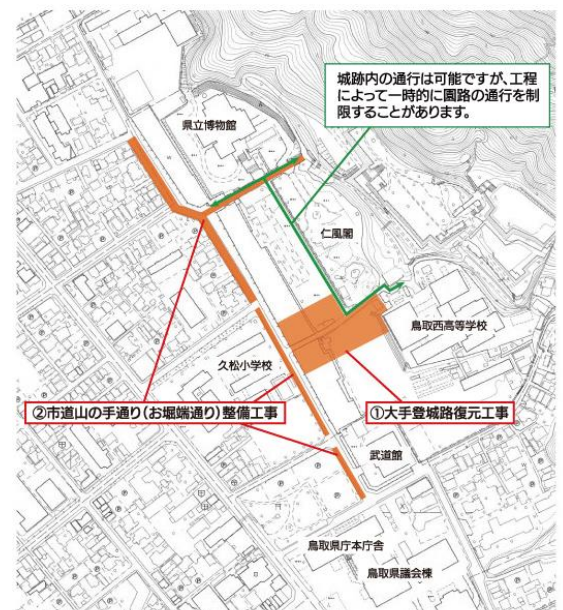
江戸時代に月見の宴が催されたり、端午の節句には若殿が橋の上に陣取って祭礼を見物するなど、さまざまに活用されていた。

事業費（擬宝珠橋復元整備工事・概算） 約 550,000 千円（28 年度～30 年度）

(2) その他の関連事業

市道山の手通り（お堀端通り）整備工事

平成 29 年度から電線の地中化工事を行っており、30 年度～31 年度には擬宝珠橋の復元に合わせた歩道の拡幅や美装化事業を実施します。

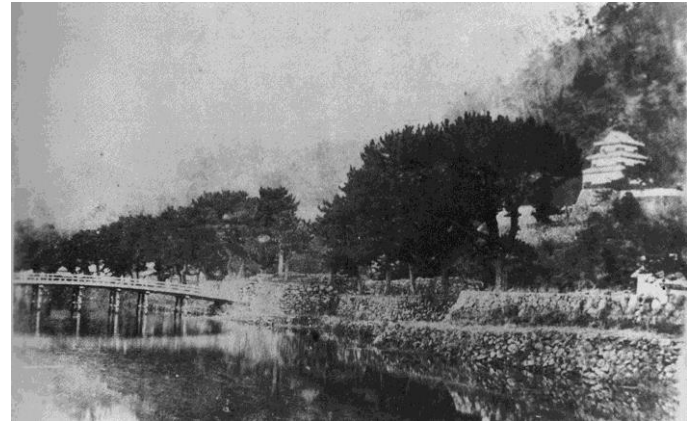


国史跡鳥取城跡・擬宝珠橋の復元

擬宝珠橋とは

大手橋にあたり、城の正面である中ノ御門へとつながる橋でした。その名の通り、欄干の親柱に擬宝珠とよばれる飾り金具が取り付けられていました。

鳥取城の擬宝珠橋は、この城が鳥取藩 32 万石の居城として整備された頃、元和 7 年（1621）7 月に創建された木造橋です。経費の削減などで堀幅を狭くすることで、短い木造橋を掛ける城郭が大多数の中、鳥取藩は、地方城郭においては、国内最長クラスの木造橋を架橋し、藩の威信を示したと考えられます。



在りし日の擬宝珠橋と二ノ丸三階櫓(明治 12 年頃)

擬宝珠橋の発掘調査

鳥取市では、平成 23 年度に、橋の復元に向けた発掘調査を実施しました。その結果、現在のコンクリート橋の下から、復元を目指す橋脚を全てに箇所において確認することができました。このことによって、復元の精度が飛躍的に向上しました。



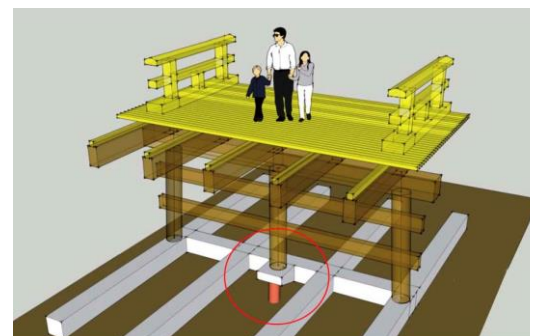
発掘調査時の様子

日本一の長さを誇る、城郭の“復元”橋

鳥取城の擬宝珠橋の全長は約 36m に及びます。この長さは、近年復元整備された国特別史跡彦根城表門橋（全長約 21m、平成 16 年復元）、国史跡山形城大手橋（全長約 22m、平成 18 年復元）を遥かに凌ぐ長さです。復元が実現すれば、文化庁が認めた城郭の復元橋としては国内最長の復元橋となります。

日本初の工法を採用

鳥取城跡のように国史跡における建造物の復元は、遺構を傷つけることなく復元することが求められます。そのため、擬宝珠橋の復元では、発掘調査で確認された全ての橋脚を傷つけることのないように、今のコンクリート橋の基礎を利用して、鉄鋼製の水中梁を設けた上で木造橋を復元するという日本初の工法を採用します。この工法によって、木造橋の耐用年数を飛躍的に延ばせることもできます。



水中梁設置イメージ図

立面図 S=1/125

